日本の木の間伐材利用とは？

間伐材とは日本の人工林において、木々の成長によって過密となった森林に太陽光を入りにやすくするため、木々を間引く際に伐採（間伐）した木々のことです。

間伐を十分に行われていない人工林では、木々は十分な栄養をつけずに細長く成長し木材としての質を失います。日が差し込まない大地には植物は成長せず、痩せた土壌は水を吸収できないため、森の役割の一つである水質浄化や貯水機能が失われます。地盤を支えられない土壌は土砂災害を引き起こし、水質汚濁は山地の川から海へと運ばれ、私たちの生活を脅かす要因の一つとなっています。

間伐とそれに伴う間伐材の利用は、私たちの現在から未来の生活を左右する一つとも言えます。木材に対する人々の関心や木材の特性を生かした生活への取り入れなど、私たち一人一人の力がその重役を担っていることは事実であり、日本の森林の再活性化が大きな鍵を握っています。

※林野庁がおおむね5年ごとに公表している「森林資源の現況」調査によると、2017年（3月末）の日本の森林面積は国土面積全体の3分の2に当たる2505万ヘクタールです。国際連合食糧農業機関（FAO）が発表する世界森林資源評価（FRA）の2015年版の報告書によると、日本の森林率（陸地面積に占める森林面積の割合）は68.5％で、OECD加盟34ヵ国の中でフィンランド73.1％に次ぐ第2位。人工林の面積もトップの中国、米国、ロシアなどに次いで世界で第7位の水準にあります。

出典：nippon.com (https://www.nippon.com/ja/japan-data/h00737/)